

ラグーナ蒲郡における、イルミネーション関連の 冬期イベント展覧会・「ラグナート」に参加しての活動報告

城 井 光 広

【要旨】 本稿では、筆者が作家としてオブジェ作品を制作、展示を行った愛知県蒲郡市にある「ラグーナ蒲郡」での、光をテーマにしたその展覧会と筆者の作品を紹介し、筆者の展覧会での成果や今後の展望について述べた。特に屋外での展示は貴重な経験になり、今後の展開の可能性を広げることになった。筆者のオブジェ制作の背景と経緯、今回の展覧会の主旨について、具体的な展示作品の見せ方や、作品の素材や、構造、仕組みにも触れた。展覧会に参加した筆者以外の出品作品の解説もおこない、筆者の作品のアートジャンルの補足も試みた。さらに展示を支える、運搬、設営、メンテナンスも再認識することになった。筆者の今後の作品の改善や、継続的な新作発表が重要である。

【キーワード】 展覧会 オブジェ アート



目 次

- 1、はじめに
 - 2、オブジェ制作の背景と経緯
 - 3、ラグーナ蒲郡の展覧会に参加して
 - 3-1 ラグーナ蒲郡について
 - 3-2 展覧会の主旨・条件について
 - 3-3 筆者の作品について 1
 - 3-4 筆者の作品について 2
 - 3-5 円型作品の詳細について
 - 3-6 タワー型作品の詳細について
 - 3-7 2011 年 1 月 7 日の取材について
 - 3-8 招待作家の作品について
 - 4、成果について
 - 5、おわりに
 - 6、引用文献等
- 要旨の英訳

1、はじめに

筆者は約 10 年にわたり、年間に 3、4 回ほど、アート作品の展示スペースや、科学館、美術館、商業施設などにおいて、オブジェ作品を展示してきた。本稿では、筆者が愛知県蒲郡市にある「ラグーナ蒲郡」で 2010 年 11 月 13 日から 2011 年 2 月 28 日まで光をテーマにした展覧会に参加し、作家としてオブジェ作品を制作、展示をおこなったその展覧会の概要と筆者の作品について、写真や図により紹介・説明し、発表活動を報告していく。また、筆者のオブジェ制作の背景と経緯、今回の展覧会の主旨・条件、筆者の作品、展覧会の印象や成果、今後の展望についても述べる。

2、オブジェ制作の背景と経緯

筆者は、昭和 58 年、大学 2 年生のころに、美術



大学のデザイン科でオブジェ制作を始めた。とりわけ、動くオブジェに興味があり、当時から光や、音センサーをとり入れたやじろべえの応用オブジェを制作した。また、障子に映る影や形に見せられ、灯籠の明かりを応用した影が動く作品などを制作し、発表をおこなっていた。大学院でも当時の新しい素材や機材を使用し、動くオブジェの制作を続けた。恩師の東京芸術大学教授の田中芳郎先生は当時、既存のデザインはある程度落ちついておりつまらないとお考えで、写真が初めて発明された時の人々の驚き、飛行機が初めて空を飛んだ時の感動や喜びなどの話をよくされていた。何かを発明するという命題を与えられた訳ではなかったが、とにかく既存に無い領域のデザインを目指すべく指導をされており、これからの人々は「物に満たされる」ではなく、「心を満たすものを求める」時代になってくる、それに応じてデザインのあり方が変わってくることを熱弁されており、筆者も大きな影響を受け

た。その後、筆者は就職し、5年ほどはグラフィックスやパッケージデザイン中心の仕事に従事し制作は休んでいたが、フリーのデザイナーになり、オブジェの制作を再開した。いわゆるバブル経済がはじけた後であったが、作品のコンペがまだまだ沢山あって、アートの発展に力を入れている企業のコンペで入選したことを機に、招待作家に選定されたり、イベント会社から展覧会に誘われたりすることが増えていった。

3、ラグーナ蒲郡の展覧会に参加して

2010年7月に、イベント企画会社から、「ラグーナ蒲郡」における、冬場のイルミネーションなどを中心とした展覧会企画への参加依頼があった。当初は展示場所に合わせて新たな作品のアイデアを検討したが、諸事情により、既存の作品を改良する案を提示し、出品することとなった。11月10日に作品

の設営をおこない。同 13 日から 3 ヶ月以上の期間の展示予定で展覧会がスタートした。

3-1 ラグーナ蒲郡について

この施設は、株式会社トヨタ、JR 東海、蒲郡市、愛知県などが合同出資し、蒲郡海洋開発株式会社が基軸となり運営を行っている。プールやジェットコースターなどがあるテーマパーク・ラグナシア、天然温泉、ショッピングモール、レストラン、リゾートホテル、ヨットハーバーなどを有する三河湾に面した複合施設である。

3-2 展覧会の主旨・条件について

主催者としては、ラグナシアの冬場使用していないプールまわり等を利用してイルミネーションをおこなってきたが、それをさらに発展させ、冬場の集客に結びつく話題作りや、ウェブでの効果的な宣伝に役立てたいという意向を持っていた。これを受けて（株）NHK ブラネットが中心となり、イベント

企画会社の（株）ライトディメンション、（株）スタジオ・エワン企画などが作家候補者を選出していった。ラグーナ+アート＝「ラグナート」というタイトルになり、参加依頼の際、下記のような条件の提示があった。

- 1、これまでは入場者は一般をターゲットの中心にしていたが、今回はアート好きな層もターゲットに加えて集客を考えている。光をテーマにしたアートには、ある程度知名度を持ったアーティストを起用し、しかもインタラクティブ性、あるいは参加型の作品を希望する。
- 2、昼間も楽しめて、かつ、夜に向けても期待させる作品で構成したい。
- 3、イルミネーションイベントを 3 ケ年計画として考えている。継続性＋発展性のある内容で、3 年後には集大成というような提案が望ましい。（これは愛知トリエンナーレ 2013 を視野に入れているからであろう。）
- 4、この地域は大変風が強く、設置には堅牢なも



写真 1 三つの作品を一まとめにした作品 全体のサイズ・W 1200 × D 1200 × H 1800

のを求める。特に安全面を考慮し、子供が触ったり遊んでも壊れたり怪我のないものが望ましい。

- 5、屋外の空きスペースを展示空間と考えており、作家が現場を見て、その場所に合った作品を検討してほしい。

以上の諸条件が作家達にも伝えられ、約10組の作家が参画することになった。

3-3 筆者の作品について 1

写真1は三つの作品を連ね、一つのケースに収めたものであり、昼間も泡の動きを楽しむことができる。施設階段の中段フロアスペースに設置し、強風に耐えられるよう、鉄とアクリルでできた堅牢なケースをボルトで固定した。鑑賞者は階段の手前か横側まで登ると観賞できる。円盤が約90秒間で1回転するのだが、回転することにより上部から空気を蓄える円弧が下部に移動する間、少しずつ空気が溢れていき、中心にある幾何形体の間を通り抜けていく

作品である。中に入っているのは流動パラフィンで、水と比較して、かなり粘度がある。下部の10ミリ程のスリットから円盤型の本体をライトアップしてあるのだが、昼間はほとんどそのカラフルな色はわからない。しかし、夕刻からはライトアップが幻想的な泡の動きを演出する。5ミリ程の厚みの空間に、透明な正3角形、正方形が挟んであり、その間を気泡が上っていく。直径12ミリ程度の大きな泡がメインであるが、この泡が幾何形体の障害物にあたってできる直径1ミリ程の小さな泡も全面に漂い、円盤面を明るく目立たせる効果を上げている。タイトルは左から「78 Triangles」、「36 Squares」、「66 Triangles-snow」である。今回のライトアップは、レインボーカラーにグラデーションの変化を見せるパターンを選択した。3つの作品はそれぞれ色の変化がずれており、思った以上にカラフルで、鑑賞者を喜ばせていた。さらに、タイマーで回転を2分ごとに15秒停止させることとした。停止させることにより、鑑賞者には単調な動きではないことを示し、



写真2 「108 Diamonds」全体のサイズ・W 940 × D 700 × H 1900

また泡も若干であるが、程よく整うことから、そのようなセッティングにした。

3-4 筆者の作品について 2

写真2の作品も施設階段の中段のフロアスペースに設置した。鑑賞者は階段の手前か後側まで登って鑑賞できる。中央の20センチ×80センチの部分がメインで、泡の動きを見ることができる作品である。5ミリの厚さの空間に流動パラフィンの液体が入っており、その空間に挟まっている幾何形体も透明で2層になっており、3カ所から泡が出てにぎやかに泡がクロスオーバーしながら上っていく。この作品の特徴は、両サイドに蛍光管があり、泡部を照らすと共に、本体全体が明るく光る作品であることである。下部も透明なアクリルできており、泡が規則正しく溢れ出て上がっていく仕組みも観察できるスケルトンタイプとなっている。泡が見える部分の高さが80センチ程あるため、下部と上部では水圧が異なり、泡の表情もさまざまだ。

3-5 円型作品の詳細について

図1～図4の作品は、アクリルを基本的な材料としている。回転させるためのインダクションモーターとギヤーボックス、タイマー、電気コード類、カラーキネティック社のiColor Cove200という

LEDライトを使用している。厚さ5ミリの空間に粘度の高い流動パラフィンが入っており、空気が液体に対して1割程入っている。この作品の特徴は円盤の背面部がミラーアクリルを使用しており、正面から見ると、鑑賞者や背景が写り込みながら、泡の動きを見ることができる点である。約90秒程で時計と逆方向に1回転する。このLEDライトにはデフォルトで17パターンの変化があり、そのパターンには、固定色を基本に、ランダムカラー、クロスフェード、色変化ストロボ、カラーウォッシュなどがある。通常はこのカラーウォッシュを設定し、レインボーカラーのグラデーションの演出にしている。この作品は、メンテナンスが容易で、振動音とネジのゆるみを調整する程度であるため、2、3ヶ月にわたる長期の展示にも、メンテナンスフリーで耐えられる。

3-6 タワー型作品の詳細について

図5の作品も基本的な材料はアクリルである。空気を送り込むための観賞魚用のエアープンプ、5ミリ、2ミリのホース、ホース用三又ジョイント、逆流防止弁、左右のスリム管蛍光灯、電気コード類を使用している。厚さ5ミリの空間が2層になっており、流動パラフィンの中を空気が幾何形体をよけながら上っていく。この作品の特徴は、ボディー全体

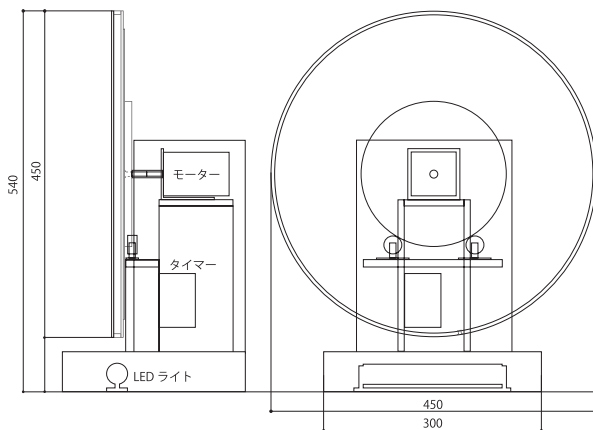


図1 円型作品図面 H 540 × W 450 × D 280

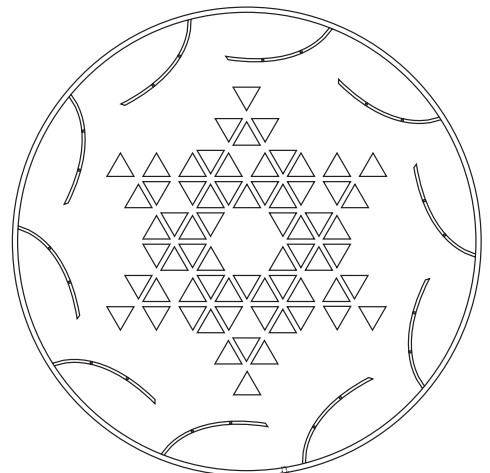


図2 図柄「66 Triangles-snow」

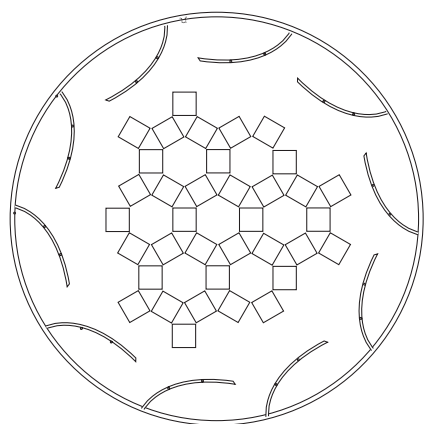


図3 図柄「36 Squares」

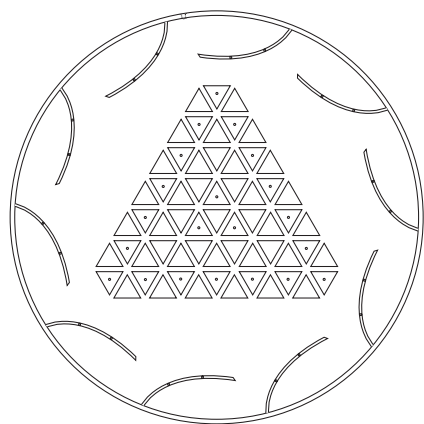


図4 図柄「78 Triangles」

にコバルトブルーの透明アクリルを使用し、下部のエアポンプや空気を一度貯めて一定量の泡粒ができていくところなどを見ることができる点である。さらに、蛍光灯部分は乳白のアクリルでカバーしてランプの形はぼけて見えるようにしてあり、ボディー全体が落ち着いたブルー系のオブジェとなっている。液体の入っている部分は高さが1メートル程あるので、泡の出量の調節が非常に難しく、長期の展示には随時の調整が不可欠である。

3-7 2011年1月7日の取材について

2011年1月7日、作品展示とイルミネーション

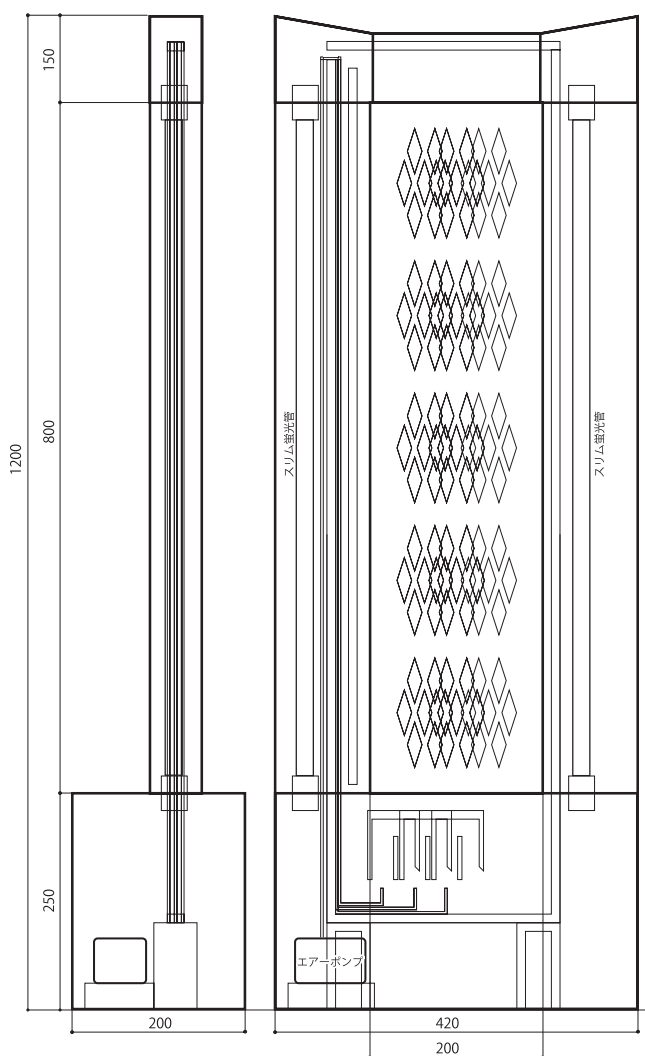


図5 タワー型作品図面 H 1200 × W 420 × D 200

をカメラに収めるため、日帰りでラグナートを訪問した。前述のように展示は11月からスタートしていたのだが、真冬の一番寒い頃が空気が澄み、光の作品がきれいに見えるであろうと考えたためである。6日が小寒（しょうかん）で暦の上では寒の入りである。午後に現地に到着し、快晴の中、夕暮れを待った。乗り換えの豊橋駅、蒲郡駅も人数は少なく、平日のラグーナの中も閑散としていた。16:30にイルミネーションが点灯された。しかし、まだまだ明るく、作品は映えない。17:00を過ぎて、少

しずつ光関連の作品群が目立ち始める。

夕焼けをバックに、17:30 くらいになると星も出て来て、風景と作品、イルミネーションがなじみ合って、とても綺麗な瞬間を迎えた感があり、少なからず興奮するなかでシャッターを切っていた。入場者たちも作品を見ながら盛んに写真を撮っていた。作品をじっくり鑑賞している感じではなかったが、楽しんでいるのが伺えた。筆者の作品は作品自体をライトアップしていなかったのに、寒く暗い闇に飲み込まれていくようであった。日の入りの前後から、ビデオカメラとデジタルカメラで撮影していた手は、寒さで動かなくなっていた。三日月が出ていたので、真っ暗ではなかったが、海と山に囲まれたその施設のあたりはとても暗く、暗さ自体や真冬の星空も味わえた。

その後マリーナに行き、稼働しているヨットのイルミネーションを見て歩いた。ヨットのオーナー達に協力してもらっているとのことであったが、ライトアップされた数十隻のヨットが停泊しているヨットハーバーは見応えがあった。帰路、暖をとりながら、休日などにはもっとにぎやかに人が集まっている様子を想像しながら帰京した。

余談になるが、愛知県内のJRの駅や車内でこの「ラグナート」のデザインに力を入れたきれいなポスターや車内吊り広告をたくさん目にした。広報活動を積極的におこなっていると感じた。NHKの地方版テレビでも、詳しく華やかに紹介されたようである。

3-8 招待作家の作品について

筆者の作品は、過去に美術館や科学館などで展示してきたが、作品の前で立ち止まり、鑑賞する場合がほとんどである。今回の招待作家たちは、ワークショップをおこなった作家を含めて、10 組程であり、参加型の作品が多かった。筆者の作品のアートジャンルの補足になることも鑑み、数点の作品を紹介する。

山内 哲也「RGB の巨人」

光の三原色による影の変化を楽しむ作品である。昼間の晴天時は、太陽の光により日時計になる。夜間は6人の巨人の顔が発光し、さまざまなパターンで地面を照らし、鑑賞者の影の色がカラフルに変わる不思議な作品である。まさにインタラクティブな作品で、大人も子供も理由はわからずとも影がカラフルに変わっていくことに驚きながら、楽しめる。



写真 3 山内哲也 W 8000 × D 8000 × H 4000

羽田野和夫「タコペラ」

音が管の中を伝わり色々なところから聞こえる、不思議なアート作品。声に変化する仕掛けもあり、皆で体験を共有する楽しさがある。



写真 4 羽田野和夫 W 3000 × D 3500 × H 3500

田山祐宇志「光の椅子」

中に人間が入ると、センサーによって光がランダムに点滅し、まるで命を得たように反応する作品である。寒い海風をしのぎ、光に包まれて座ることができる。



写真 5 田山祐宇志 W 3500 × D 3500 × H 4000

そのほか、光ファイバーとLEDとモーターが作り出す残像によって、立体的な形態を作る加藤良将、光の箱を創るワークショップなどで活躍する松村泰三、TOCHKA(ナガタタケシとモンノカヅエによるクリエイティブユニット)、谷川 寛+栗本真竜らが参加した。

4、成果について

今回の展示では屋外展示に関する貴重な経験ができた。屋外での作品は、屋内に比較して作品が小さく見えることや、陽が落ちて暗くなっていく変化の中での作品の映え方などを見ることができた。屋外で風が強い場所に展示するための堅牢な専用ケースの制作もよい経験になった。

関係者によると筆者の作品は、子供から大人まで泡の動きやライトアップの変化を楽しむことができ、よい評価を得たようである。

また、新たな作家達に会い、さまざまな情報交換の機会を得たことも大きな成果であった。彼らの最新作に触れ、筆者の制作に対するモチベーションも少なからず上がった。

さらに、最近自身で作品を搬入・設営、搬出することに関われず、業者の方などに依頼することが多い。今回も搬入や屋外用ケースへの設置や、搬出を業者の方々に依頼したが、特に長期にわたる展示だったので、作品の破損、液漏れなどのトラブルがない作品にしていかなければならないことを強く意

識したことも、成果として受けとめている。

5、おわりに

筆者は以前、ウェブページで作品を紹介、公開していたのだが、静止画のみであった。動く立体作品が多いので、動画コンテンツで鑑賞可能なものを検討したい。「ラグナート」はラグーナ蒲郡によって、静止画に留まらず、全景やアップなどの映像も魅力的に更新しながら紹介してくれたことがありがたかった。

ところで、約3ヶ月間「ラグナート」を開催し、入場者数は、前年と比較してやや上回ったようであるが、アート作品の展示を継続していくことでさらに増加につなげて欲しいものである。また、遠隔地で、しかも長期間の展示であったので、搬入・設営、展示期間中の管理、搬出について、改めてたくさんの関係者の方々の協力があって実現したことも再認識したと同時に、関係者の方々にはたいへん感謝している。

今回、この紀要の原稿をまとめるにあたり、筆者の作品制作の原点を振り返り、経緯などを再確認できた。また、今後の制作目標やアトリエの環境整備をおこなうことを意識でき、大きな収穫を得ることができた。

新作を制作し、定期的な個展や公募展応募も継続していくべきと考える。そのためには、国内外の「メディアアート（ビデオやコンピュータ技術などを用いた美術）」や「キネティックアート（動く美術作品、もしくは動くように見える美術作品）」の展覧会などの作品鑑賞や定期的な作品のアイデア捻出時間の確保をおこない、作家との交流を地道に続けていかなければならないと考えている。特に、アートの世界では表現の進化は早く、新しい素材・技術と関係していく作品は、すぐに古くなり既成化してしまう。筆者には2011年度もグループ展などの発表の予定があるが、発表活動を継続し、新たな活動報告をおこなえるように努力していくつもりである。

6、引用文献等

ラグーナ蒲郡ウェブページ：

<http://www.laguna-gamagori.co.jp/index.html>

蒲郡海洋開発株式会社 イラスト及びマップ

**Displaying works of art in Lagunart, the winter exhibition related to
illuminations in Laguna Gamagori.**

Mitsuhiro KII

[Abstract] This report describes the author's works of art displayed in the exhibition in Laguna Gamagori, a marine resort in Gamagori City, Aichi Prefecture, which features light as its theme. The report first shows the author's background, which leads up to the production of the works of art, and how the author became involved in the exhibition. Then it gives a detailed account of the materials that make the works of art, their structures, their mechanisms, and the way they are put on display. The report also briefly introduces works of art by other authors that complement the author's works of art in terms of art genre. The display in the open-air has been so instructive that it inspires the author's creativity. The involvement in the exhibition also deepens the author's understanding of supportive work behind the scenes such as transport, setting up and maintenance. This experience should lead to better creative work in the future.

[Key Words] Exhibition Objet Art